



Title	『11か月時と20か月時の遊びにみられる行為の構造と順序性』：事例研究
Author(s)	中野, 茂
Citation	北海道大學教育學部紀要, 42, 147-156
Issue Date	1983-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/29267
Type	departmental bulletin paper
File Information	42_P147-156.pdf



『11 か月時と 20 か月時の遊びにみられる行為の構造と順序性』

— 事例研究 —

中 野 茂

Action structures and sequences of an infant's play at eleven-, and twenty-month- of age : A case study

Shigeru Nakano

< 問 題 >

子どもの遊びは、誰にも知られた、なじみ深い活動である。それにもかかわらず、子どもの遊びの価値についての確たる証拠は、これまで十分に示されてはいない (Weisler & McCall 1976)。

しかし、最近、いくつかの研究によって、遊びの機能に関する1つの見解が示唆されている。それらによると、子どもの遊びは、実用には不十分な行為を、可能な対象に適用し、練習する場であるという (Miller 1968, Garvey 1977, Dolhinow & Bishop 1970)。さらに、Bruner (1973)によれば、個々に独立な行為は、遊びの中での練習を通じて組み合わせられ、sub-routine化し、それらが、相互に結びついて - assembleされ - より順序性 (sequence) を持った、より高次の行為パターンへと移行していくという。この結果、子ども達は、対象の必要性に応じて、自在に、個々の行為を組み立てられるようになっていくと考えられる。このことは、同時に自分のスキルのレパートリィに関する知識 (つまり、何ができるか)、及び、目標に達するために、それをどう組み立てるかという手続きに関する知識の獲得を示すものとしても考えられる。

こうした遊びの中での行為の構造化の過程は、2歳ころまでに一応の順序立った行為系列に達することが、これまでの諸研究 (例えば、Fenson & Ramsay 1980, 1981) から、知られている。そのおおよその過程は次のようである。まず、1歳ころ、2つの行為の組み合わせ (Fenson & Ramsay, 1980)、関係づけ (relational play; Fensonら 1976, Largo & Howard 1979, Lowe 1975) が出現するが、まだ対象と行為との結びつきは不確実 (undifferentiated exploration; Belsky & Most 1981) で、無関係な適応的行為を組み合わせようとする反復 (Piaget 1946/62) を含んでいる。つまり、"The object is what I do" または "What is this and what can it do?" (McCallら 1977) の時期である。

15, 16 か月ころになると、対象物と対象物の組み合わせは、その機能に適応したセットを構成するようになる (Belsky & Most 1981, Lowe 1975)。また、"作用するもの" と "作用を受けるもの"、"入れ物" と "入れられる物" のような、対象独特の機能の理解を示す遊び (container play; Largo & Howard 1979) が現われる。つまり、対象の持つ機能の確定化の時期と考えられる。

さらに、1歳半から2歳ころになると、2つの行為パターンの組み合わせ (2 parts action sequence; Fenson & Ramsay 1981) が可能となり、"ごっこ" 遊び (symbolic play) が出現する (Belsky & Most 1981, Lowe 1975, Fensonら 1976)。また、代理物による表示対象の表現 (Jackowitz & Watson 1980) も可能とする。従って、この時期には、"脱文脈化 (decontextualize)" した行為の系列が出現する。換言すれば、行為の組み立てが、自在化した状態といえよう。

このように、これらの先行研究によって、行為の構造化の発達の過程は明らかにされつつあるが、その多くの研究で用いられている接近法が、カテゴリー的な分類のため、Bruner (1973) が示唆した行為の序列構造や、行為を組み立てていくための手続き的知識 (procedural knowledge; Greeno 1980) の記述は十分にはなされていない。そこで、ここでは一事例の縦断的追究によって、これらの点を明確化するために、予備的な方法論的検討を行なう。

＜ 方 法 ＞

(1) 対象児～満期産・正常分娩の男児1名。知的・身体的障害は認められない。

(2) 手続き～対象児は、11か月時と、20か月時に、母とともに実験室へ来て10分間の遊びをした。対象児の遊びの間、母と女性の実験者が同室していた。2人は部屋の隅に座り、中立的態度で、対象児に接した。遊びの中の対象児の活動は、すべて、遠隔操作によってビデオテープに記録し、後に分析した。

(3) おもちゃ～11か月時；ままごとセット、電話（車付き）、ガラガラ、重ねコップ、ボール、人形、らっぱ、

20か月時；ままごとセット、砂場セット、タオル、人形、電話(2)（車付きとプッシュホン）本、ブロック — これらのおもちゃが部屋の中央に広げて置いてあった。

(4) 分析方法～序列構造の分析をするために、次の行為水準を考案した。

① act；「持つ」、「振る」、「つなぐ」などのように、対象と直接結びついた行為

② action；対象の操作のために、actsが一連の結合をしたもの。（例；スプーンでコップから何かをすくい人形の口へもっていく。）

③ sequence；ある一定の状況を構成するような actions の系列。（例；ままごとで「お料理する」「できたものをサービスする」などのまとまり。）

④ episode；1つのテーマに関連した sequences の系列。（例；「ままごとあそび」、「ガラガラを鳴らす」）

これらの行為水準は、発達的には、より複雑な、つまり、より多くの下位行為水準からなる樹状図を示すとの予測のもとに設定された。なお、最も、単純な構造は、傍観、振り向くなどの場合で、「1 act - 1 action - 1 sequence - 1 episode」となる。

＜ 結果と考察 ＞

I 序列構造の分析

(1) 序列構造の発達の变化

11か月時と20か月時における、各行為水準の頻度が、Table 1に示されている。それによると、予想に反して頻度の上では、両月齢時で、類似な傾向が認められる。しかも、各行為水準に含まれている下位行為数の平均では、action - acts の関係以外のすべてで、20か月時より、11か月時の方が、高い数値を示している。

従って、この結果に従えば、11か月時の方が、20か月時より、より複雑な序列構造を示していたことになる。

しかし、この一見奇妙な結果は、同一行為の反復を考慮することによって、理解可能となってくる。つまり、11か月時の action の 40.0%，act の 45.5% は、同一行為の反復である。しかし20か月時では、反復行為は、action で 19.6%，act で 13.9% にすぎず、有意に少ない (action

Table 1 両月齢における各行為水準の頻度

		Episode	Sequence	Action	Act
11か月	頻 度	8	18(1)	60(24)**	112(51)***
	含まれる下位行為の数		2.3 (. 1)	3.3 (1.3)	1.9 (. 9)
20か月	頻 度	13	20	46(9)	101(14)
	含まれる下位行為の数		1.5	2.3 (. 5)	2.4 (. 3)

() 内は、反復回数を示す。**, ***は、有意に他の月令より高いことを示す (**P<. 01, ***P<. 001)。

; $\chi^2 = 6.82$, $df = 1$, $p < .01$. act; $\chi^2 = 17.52$, $df = 1$, $p < .001$)。

以上のことから、上述の逆転した発達傾向は、11か月時での行為の反復が高頻度だったことに基づくものといえる。

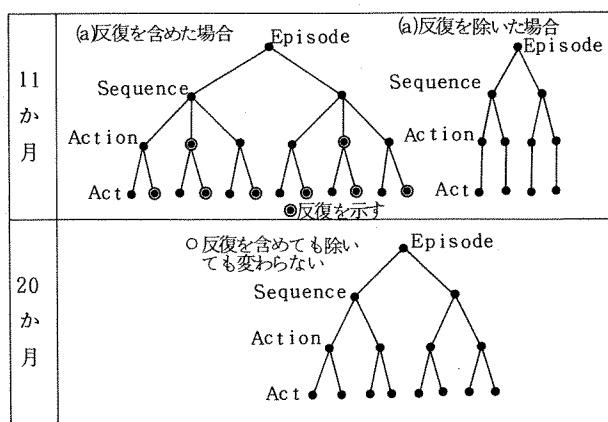


Fig.1 両月齢時における序列構造の平均的モデル

になっている。しかし、その右側に示されている、反復された行為を除いた場合には、逆に、20か月時より、単純な構造になる。特に、この傾向は、act - actionの関係で顕著である。

Table 2 含まれるActs数によるActionの比較

	項目	Act 数	1	2	3以上	計	χ^2
11か月	頻 度		18	33	9	60	N. S.
	異なるActs数 ^{a)}		13	17	6	36	
20か月	頻 度		11	23	12	46	*
	異なるActs数 ^{a)}		8	17	12	37	

a) 頻度から反復を差し引いて算出された。

(N. S. ; P>. 05 . * ; P<. 05)

(2) 行為の反復

Fig.1 は、Table 1に示された。各水準に含まれる下位行為数の平均値を、近似的整数に直して、モデル時に示したものである。このモデル図から、上述の両月齢時における反復された行為の出現傾向の違いが明確になってくる。

まず、11か月時の結果をみると左側に示されている反復された行為を、そのまま1つの構成要素とした場合の序列構造では、1 sequence中に3 actionsが含まれ、20か月時の2 actionsより複雑な樹状図

そこで、1 actionが、いくつかの acts, を含んでいるかを比べてみたものがTable 2 である。これによると、反復された action を独立に数えた場合には、1 actionに含まれる act (s) 数による分布傾向は、両月齢時で同じだった。しかし反復を除いた、異なる action 数でみた場合には、11か月時で

は、1 act からなる action が、20 か月時では、3 acts 以上からなる action が有意に多いという傾向が認められた ($\chi^2 = 7.52$, $df = 1$, $p < .05$)。

従って、11 か月時に特徴的な action・act の反復傾向は、一時的、単純に終わってしまうような行為の系列を、よりふくらませ、より序列化し、継続させるような役割を担っているように思われる。このように、反復による行為の継続化は、順序立った行為を獲得しようのような発達の筋道を導くのではないかと考えられる。同様の考えは、Nicolich (1977) によっても示唆されている。

尚、sequence, episode の水準が両月齢で違わなかった点は、さらに、広範囲の月齢との比較検討が必要なことを示唆するものといえる。

II 内容的分析

(1) 両月齢時での典型的行為系列

Fig. 2 には、両月齢時に典型的な行為系列のプロトコルが示されている。11 か月時のプロトコルは、「なべ」の中で「ガラガラ」を揺り動かす行為の達成までの過程を示したものである。つまり、試行錯誤による偶発的事態の再現 (Piaget 1946) の過程といえる。

その過程をみると前半では、何回もの試行錯誤が繰り返されているが、2 つの対象の偶発的組み合わせを再現した後では、反復は消失し、それを1つの道具のように扱い、しかも、操作しながら笑ったり、よそ見をしたりさえしている。この部分では、偶発的に生じた新たな組み合わせを“自分のもの”として獲得したこと、換言すれば、組み合わせ手続き, skill の自在化に達したことを示していると考えられる。

従って、11 か月時の行為の特徴の1つは、対象と対象の組み合わせによる新たな対象の創出、つまり、関係づけ遊び (relational play; Fenson ら 1976, Largo & Howard 1979, Lowe 1975) と考えられる。その組み合わせ行為の特徴は、対象相互の必然的關係

11 か 月	20 か 月
なべ(㊦)をおく ガラガラ(㊦)をおく (偶然、㊦に㊦入る) <u>それを見つめる</u> ㊦の中で㊦を振る (打ち当たり音をたてる) ㊦から㊦をとり出す <u>㊦と㊦を打ち合わせる</u> ㊦をおく ㊦, ㊦を見つめる <u>㊦を㊦に打ちつける</u> ㊦, ㊦を見つめる ㊦に㊦を押しつける <u>㊦を見つめる</u> ㊦に㊦を入れる(失敗) <u>㊦を振る</u> ㊦に㊦を入れる(成功) ㊦の中で㊦を振る (打ち当たり、音をたてる) <u>ほほえむ</u> ㊦の中で㊦を振る ほほえむ 母に笑いかける ㊦から㊦をとり出す <u>㊦を見つめる</u> <u>㊦を振る</u> ㊦を㊦に入れる(成功) <u>それを見つめる</u> ㊦の中で㊦を振る ほほえむ <u>㊦, ㊦を見つめる</u> ㊦の中で㊦を振る 振りつつ、よそ見	(1) シャベルを見つける <u>手に持って出口へ行く</u> 母に何か言う <u>出口を指さす</u> 母に近づく 母の手を引く 出口を指さす (2) コップをつかむ <u>バケツにあける</u> <u>シャベルでかきまぜる</u> <u>シャベルでコップにつぐ</u> <u>シャベルでかきまぜる</u> <u>バケツを下げて移動</u> タオルをつかむ <u>バケツに入れる</u> <u>シャベルで押しこむ</u> タオルをとり出す タオルをうら返えす タオルをバケツに入れる (3) ほ乳びんをつかむ <u>ふたをねじる(あかず)</u> <u>振る</u> 母にさし出す <u>(母「あかないの」)</u> <u>ふたをねじる(あかず)</u> <u>(母「あかないよ」)</u> (中略) ふたをねじる(あかず) (母「いいのあけなくても」)

Fig. 2 両月齢時に典型的行為系列のプロトコル
 (—— は action の切れ目を、~~~~ は sequence の切れ目を示す)

性（例えば、コップと皿）とは無関係に組み合わせられ、しかも、act 相互の組み合わせによって、次の新たな act の出現（つまり、2 parts action sequence）とはならず、新たな組み合わせに、それまでの act をあてはめている点である。

しかし、この場合でも、「なべ」の外で「ガラガラ」を振るのと、「なべ」の中で振るのとでは、同系統の act でも、その表出で異なり、act の分化、適応化への方向性を示していることは注目されよう。

このように、11 か月時では、対象相互の機能についての知識は限られてはいるが“初歩的な組み合わせ”の手続き、同系統内行為の分化的使用は、可能であるように思われる。

次に、20 か月時の事例をみると、一定の対象が、一定の行為スキーマを喚起させていることが認められる。さらに、個々の action は、順序立ったものとなり、11 か月時のような試行錯誤は、もはや、認められない。しかも、事例(2)では、“空想の液体”を①コップからバケツへ、②バケツからシャベルへ、③シャベルからコップへへと、その所在に反しないように順序立てて“移動”させている。同様に、事例(1)では、シャベルが存在しない砂場へ行くスキーマを喚起させている。

これらの事例は、20 か月時では、対象の実在性にかかわらず、一定の手続きで、自動的に行為の系列を進められていること、つまり“行為系列の自動化”に達していることを示唆していると考えられる。

一方、事例(3)では、(1)、(2)同様、は乳びんが、ふたをとるスキーマを喚起させているが、ここで特徴的なのは、ふたをはずそう（おもちゃなので、実は、はずれない）という行為へのこだわりである。11 か月時と違って、対象に、一応、適応した act の反復である。同様の反復の再現は、事例(1)の外出要求にも認められる。

これは、一定の行為系列のスキーマの確立によって、「自分に、何ができるか」を知っているが、それが、その一方で、その場面全体に「客観的に調整」（El' konin, 1960）されていないため、ステレオタイプになったためと思われる。従って、20 か月時では、まだ、臨機応変な行為の系列化の立て直しによって、葛藤場面を解消できるまでには至っていないのではないかと考えられる。

(2) Act と対象との対応関係

Table 3 Act - Object 対応関係

	1 Act に何種の Objects か		1 Object に何種の Acts か	
	① Object / Act	② Variation / Act	③ Act / Object	④ Variation / Object
11 か月	$\frac{21}{8} = 2.60^{***}$	$\frac{8}{8} = 1.00^{***}$	$\frac{20}{8} = 2.50$	$\frac{16}{8} = 2.00^{***}$
20 か月	$\frac{27}{20} = 1.35$	$\frac{3}{20} = .15$	$\frac{34}{12} = 2.83$	$\frac{9}{12} = .75$

(*** $p < .001$)

ているのに対し、20 か月時では、1対1に近い。また、表の④に示されているように、11 か月時では、1 object の位置を変化させ、その異なる側面に、同一の act を結びつける（例、コップを（上から・下から）重ねる）ことが認められたが、20 か月時では、ほとんど見出されなかった。これらの傾向は、ともに有意であった（①； $\chi^2 = 15.63$, $df = 1$, $p < .001$ 。②； $\chi^2 = 25.15$, $df = 1$, $p < .001$ ）。

従って、11 か月時では、対象の性質・機能の知識が限られているため、1 act に必ずしも、実用的ではない対象を含めた（例；「振る」に対し「なべ」）対象を act - object のスキーマのあ

Table 3 は、act と対象との対応関係を示している。まず、1 act にいくつの対象が対応するかをみてみると、表の①に示されているように、11 か月時では、1つの act に2つ以上の対象が対応し

いまいなスロット (slot ; Greeno, 1980) に投入していると考えられる。しかし, 20か月時になると, 対象は, その性質にあった機能を含んでいることが理解され, その機能と対象との固定的関係性に至るのであろう。

一方, Table 3の右半分に示されている。1 objectに, いくつの act が結びついているか, 即ち, 対象の機能が, どれ程理解されているかをみてみると, ㉔に示されているように, 11か月時で, 2.5, 20か月時で, 約3であり変わらない。

ところで, この20か月時の結果は, act と object との1対1対応を示した, 前述の㉔の結果に反するように思われる。しかし, ここでの結果は, object が, 複数の機能を持つことを示し, ㉔の結果は, それらの機能の1つ1つと act とが対応していることを示すと解釈すると, 対立はなくなる。つまり, 20か月時では, 対象の機能を確定し, それに対応した行為をしているのである。

次に, ㉔に示されている1 object に働きかける act の同系統内の変化 (例えば, 「振る」行為を「大きく」又は, 「小さく」表わす) をみると, 20か月時に比べて11か月時では, このような act の表出の変化が有意に高い ($\chi^2 = 13.64$, $df = 1$, $p < .001$)。このことは, 11か月時では, 1つの対象に1つの act がもたらす効果が働きかけ方によって, どのように異なるかを調べているように思われる。つまり, 冒頭にも記したように, 11か月時のこのような行為は, まさに, 「What is this and what can I do ?」(McCallら1977) の探索を示すものと考えられる。

一方, 20か月時では, そのような act の表出の変化は, 平均1回に達せず, 一定の対象へは, 一定形式の働きかけ方をしていることが示唆される。つまり, 対象操作に最適な行為の表出の仕方を獲得してしまっているといえよう。さらに, 別の見方をすれば, 個々の act が対象にどのような反応を生じさせられるかの知識を持っている (Ungererら1981) ともいえよう。

以上述べてきた, Table 3の㉔~㉔の結果をまとめると, 11か月時は, act - object の関係が確定せず, object も, act も複数の形態をとることで, 組み合わせの適性を捜し出している段階のように思われる。一方, 20か月になると, act - object の機能との1対1対応が出てくるため, object も act も一定形態をとるようになると考えられる。

(3) 中心的行為の比較

Table 4は, 両月齢について, 出現頻度の高い acts が示されている。この結果から, 11か月

Table 4 両月齢時の中心的行為

11 か 月		20 か 月	
Act	%	Act	%
○○を△△に入れる	24.4	ダイヤルを回す	12.6
○○で△△を打つ, 叩く	20.7	○○をバケツに入れる	12.0
○○を振る	18.3	○○を母にさし出す	9.2
○○を調べる	12.2	受話器を耳にあてる	8.0
		○○を調べる	6.9

時では「入れる」・「叩く」・「振る」の3 acts だけで, 全 acts の63.4%を占めてしまうのに対し, 20か月時では, 電話器操作に関係した2つをまとめた場合, 20.6%になる以外, 11か月時のような限られた acts への集中傾向が

認められなくなることがわかる。このことは, 20か月時における行為のレパートリィの拡がりを示唆するものといえよう。もう1つの示唆されることは, 11か月時の acts は, 個々の対象から独立しているが, 20か月時では, 対象に特殊なことである。この点は, 上述の Table 3の結果を別の面から確認するものといえる。

ところで、これら2つの点は、相互に結びついていると考えられる。つまり、20か月間までには、対象に独特の機能の存在が理解可能となり、act は、対象に特殊化し、そのレパートリは適応的に広がっていったのではないかと考察される。一方、11か月では、上述したように act - object のスキーマに様々な対象のあてはめをしているため、いくつかの acts への集中傾向となったと思われる。また、11か月時に中心的な「入れる」、「叩く」の acts は、2つの対象を道具的に結びつけようとする試みを示すと考えられ、この時期の遊びの特徴が、関係づけ遊び (relational play; Fenson ら, 1976, Largo & Howard 1979) であるという知見との一致を示している。

(4) 11か月時、20か月時に特徴的な行為の系列

Fig.3 に、いくつかの事例が示されているように、11か月時に特徴的な行為の系列は、2 objects 間の“役割交替”である。そこで注目されることは、手順 A の act・action が逆方向からの手順 B でも示されている点である。このことは、数か月後に出現する、2対象の機能の適切なセット化 (accomodative relational acts; Fenson ら 1976, functional - relational play; Belsky & Most 1981) に至る枠組みの形成を示しているように考えられ興味深い。しかも、この役割交替の枠組の中では、act・action の手順の確立とそれが、対象によって、どれ程異なる結果がもたらされるかを理解することが容易に思われる。

11か月時の Role Change	20か月時の Sub - routine
(1) { コップ(小)をコップ(大)に重ねる (失敗) コップ(大)をコップ(小)に重ねる (失敗)	タオルをバケツに入れる ブロックをつかむ タオルをバケツから出す ブロックをバケツに入れる タオルを入れる sub-routine タオルをとり出す タオルをバケツの縁にかける
(2) { ふたでフライパンを叩く フライパンでふたを叩く	
(3) { ガラガラをなめ、なべを振る なべをなめ、ガラガラを振る	

Fig. 3 両月齢時に特徴的な行為系列

従って、これまで述べてきた、11か月時の act - object スキーマのあいまいな関係性は、このような枠組にはめこまれることによって、確かなものへと進んでいくのではないかと考えられる。

但し、この役割交替が、act-object 関係のあいまいさより後に出現し、後者が前者に収束していくかどうか、及び、この役割交替が、本研究の対象ケースに独特なものかを、今後確かめていかなくてはならない。

一方、20か月時に認められた興味深い行為の系列は、Fig.3 の事例が示すように、一連の行為の進行途上に“sub-routine”を含む系列である。事例では、ブロックをバケツに入れる前に、ブロックへの働きかけを一時中断して、タオルに関する sub-routine を働かせ、その中にブロックを入れこんでいる。これは、ゴールへ至る道筋の上での廻り道と考えられ、16-24か月ころ、廻り道による課題解決ができるようになるという、Koslowski & Bruner (1972) の知見とも一致している。しかも、この事例にみられるように、何らの誤行錯誤なしで、そのような行為が可能なのは、行為を実行する前に、あらかじめ、予見 (Preplanning; Fenson & Ramsay 1980) することが可能なことを示唆するものといえる。換言すれば、手順に関する知識を

獲得してしまっているといえよう。ところでこのような行為系列が、20 か月で可能になった最大の要因を考えてみると、前述の act - object の機能との 1 対 1 対応が考えられる。なぜなら、予見を立てるためには、対象を見た時に、自分がそれに対してどのようなことができるかを理解していなくてはならないし、目標に達するように行為のレパートリーの知識から必要なものを選択できなくてはならないからである。従って、順序立った行為系列が生み出されるためには、act, object の機能が確かなものになっていることが、必要条件に思われる。

＜ 結 論 ＞

ここから得られた結果から、11 か月と 20 か月とにおける行為の構造・順序性を記すと次のようになる。

(1) 11 か月時～同一 act, action の反復が、この時期に特有の行為である。この反復によって、この時期では、単純な活動の構造を、20 か月時と同程度にふくらませることが可能だった。また、act - object の結合が確定せず、act, object とともに、そのスキーマにいろいろな対象をあてはめているようである。しかも、act は、2～3 の限られたものに集中していた。この時期に特徴的な行為の系列は、2 つの対象間の役割交替で、それによって、2 つの対象のセット化の枠組を作っているようであった。

このように、11 か月時での遊びの中の行為は、対象相互の関係づけに向けられ、その中で新しい組み合わせに必要な手続き、行為の調整を学んでいるのではないかと考えられる。

(2) 20 か月時～20 か月時になると、反復は消え、行為の構造は、順序立てられ、確定化される。それと同時に、act - object スキーマは定形的になり、act は対象の機能に特殊なものとなる。その結果、ある対象物は、一定の行為のスキーマを自動的に喚起させるようになり、そのようなスキーマの自動化によって、象徴行為、sub-routine を含む行為系列及び、それに必要な予見が可能になっていく。反面、生じた行為のスキーマへの固執という行為の硬さも、また同時に現われた。

このように、11 か月の時の行為の形態と 20 か月の時のそれとは、大きく違っていた。一口で言えば、11 か月時は、探索的であり、20 か月時は手続き的であるといえる。このような 9 か月の間の飛躍的発達には、何がどうなって生じたのであろうか？

残念ながら、ここから得られた結果からは、両月齢時の直接的な重なりは認められず、違いがきわだつばかりで、この問いにすぐに答えることはできない。

従って、ここで見出された、反復による構造の発展化、新たな組み合わせの試行、役割交替などの 11 か月時の特徴が、20 か月までの 9 か月間にどう変わりゆくかを、また、Belsky & Most (1981) が、transitional play として示した、13-18 か月の間で著しい行為形態、及び、Fenson & Ramsay (1980) が示唆した、act - object 結合に必要なコンピテンスとそれらを順序づけるコンピテンスの違い、さらに反復のように、それぞれの月齢で異なる文脈で再現されるものなどを検討していくことが、今後の課題といえる。

以上の結果は、冒頭で述べた、“子どもの遊びは、行為の組み立ての練習の場である”という見解に沿ったものといえる。11 か月時の遊びは、特に、そのような練習に満ちているようであった。1 つの行為をできるようにするまで執拗な反復を繰り返していた。しかし、このような練習的な活動を“遊び”と言えらるのだろうか。黙々と達成を目指して励む姿はむしろ“学習”と言えらるよう思われる。Fig. 2 に示した 11 か月時のプロトコルが示唆するように、“楽しげな”表情は、練習の場面を抜け出してからであった。つまり、行為の自在性を獲得してではないかと考えられる。このこと

は、20か月時で現われた“ゴッコ遊び” — 子どもの遊び形態の典型と考えられる — では、行為の練習的反復が姿を消していることから考えさせられる。

このように、遊びが“遊び的 (playful)”になるためには、自由自在に自分の行為を遂行でることが必要に思われる。従って、一般に“遊び”と言われる場面の中から“学習的”部分と“遊び的”部分とを抜き出し、それらの関係性を問うていくことが幼児の遊びを理解していくうえで今後の重要な課題に思われる。

＜付 記＞

本研究で使用した資料は、『発達初期における社会化の日米比較研究』（代表者 三宅和夫）で収集されたものである。資料収集に携わった方々に、心から感謝したい。

引 用 文 献

1. Belsky, J. and Most, R. K. 1981 From exploration to play: A Cross-sectional study of infant free play behavior. *Developmental Psychology*, 17, 630-639.
2. Bruner, J. S. 1973 Organization of early skilled action. *Child Development*, 44, 1-11.
3. Dolhinow, P. J. and Bishop, N. 1970 The development of motor skills and social relationships among primates through play. *Minnesota Symposium of child Development*, 3, 141-198.
4. El' konin, D. B. 1960 (駒井邦男訳 1964「ソビエト・児童心理学」明治図書)
5. Fenson, L., Kagan, J., Kearsley, R. B. and Zelazo, P. R. 1976 The developmental progression of manipulative play in the first two years. *Child Development*, 47, 232-236.
6. Fenson, L. and Ramsay, D. S. 1980 Decentration and integration of the child's play in the second year. *Child Development*, 51, 171-178.
7. Fenson, L. and Ramsay, D. S. 1981 Effects of modeling action sequences on the play of twelve-, fifteen-, and nineteen-month-old children. *Child Development*, 52, 1028-1036.
8. Garvey, C. 1977 Play.
Fontana/Open Book.
9. Greeno, J. G. 1980 (大塚雄作訳 1982「数学の問題解決と理解」サイコロジー, 23, 24)
10. Jackowitz, E. R. and Watson, M. W. 1980 Development of object transformations in early pretend play. *Developmental Psychology*, 16, 543-549.
11. Koslowski, B. and Bruner, J. S. 1972 Learning to use a lever. *Child Development*, 43, 790-799.
12. Largo, R. H. and Howard, J. A. 1979 Developmental progression in play behavior of children between nine and thirty months. I: Spontaneous play and imitation. *Developmental Medical Child Neurology*, 21, 299-310.
13. Lowe, M. 1975 Trends in the development of representational play in infants from one to three years - An observational study. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, 16, 33-47.

14. McCall, R. B., Eichorn, D. H., and Hogarty, P. S. 1977 Transitions in early mental development. *Monographs of the Society for Research in Child Development*, 42.
15. Miller, S. 1968 The Psychology of Play. Penguin Books.
16. Nicolich, L. M. 1977 Beyond sensorimotor intelligence: Assessment of symbolic maturity through analysis of pretend play. *Merrill-Palmer Quarterly*, 23, 89 - 99.
17. Piaget, J. 1946/1962 Play. Dreams and Imitation in Childhood. Norton.
18. Piaget, J. 1948 La Naissance de L'intelligence Chez L'enfant. (谷村寛・浜田寿美男訳 1978 「知能の誕生」, ミネルヴァ書房)
19. Ungerer, J.A., Zelazo, P. R., Kearsley, R. B. and O' Leary, K. 1981 Developmental changes in the representation of objects in symbolic play from 18 to 34 month of age. *Child Development*, 52, 186 - 195.
20. Weisler, A. and McCall, R. B. 1976 Exploration and play: Résumé and redirection. *American Psychologist*, 31, 492 - 508.